銃後

長谷川　三枝子　（本中山・62歳）

昭和三年生まれの私は、十二年七月七日、日中戦争始まりも、十六年十二月八日、太平洋戦争始まりも義務教育中のことでした。還暦を過ぎ記憶に残る当時の体験を書いてみます。

義務教育

・登下校は、はだし（素足）だった。
・登下校の時校門で直立不動の姿勢をとり、奉安殿と校訓の方向に最敬礼をした。
・毎朝第一時間目は教育勅語で始まった。
・作文の時間は戦地への慰問文を書いた。
・体育の時間ははだしで、必ず横隊行進（閲兵）の訓練があった。
・べんとうのおかずは、梅干し一個の「日の丸べんとう」だった。
・校庭には軍事教練用に、長い壕があった。
・たくさんの出征兵士を、戦時歌謡を歌い日の丸の旗を振って見送った。
・軍馬用の干草苅り、織物用の桑の皮むきの勤労奉仕をした。
・度々戦死者の遺骨迎えや村葬に参加した。
・国債の割当てを学校で買った。
・卒業旅行は中止されて、できなかった。
・尋常高等小学校が、国民学校になった。

東京大空襲

昭和二十年三月九日の夜、東京下町（したまち）は大空襲だった。その頃は、千葉県市原郡五井町（いちはらぐんごいまち）（現市原市）に住んで居り、そこでも空襲警報になっていた。

東京湾の向こうに爆撃を受けて燃え真赤になった夜空が見えて眠られない夜でした。朝が来ても空は煙で暗く、日中になっても太陽は、ぼんやりしたあかりみたいで焼残った紙切れや、大小の薄っぺらな灰がたくさん飛んで来て大人達は「大正十二年の関東大震災の時のようだ、大変だ」。と言ってましたがその中に多勢の人が線路伝いに歩きで避難して来るようになりました。私は十六才で、若い医師がどんどん軍医になるので、市原郡医師会長だった年配の医師の所で、看護婦資格取得のため修業中でした。内科・小児科看板のその医院へも、親類にたどり着いた病人や、けが人が治療に見えたのです。

或るけが人は、あたり一面の炎の海で逃げられなくて掘井戸にとび込んだが、次々とはいる人で身動きとれなくなった。そして井戸の屋根が燃え火が柱に燃え移ったが、水をかけて消すことも、よけることも出来ないまま「やけど」したそうだが、背中の火傷は縦長に中心部は黒くて硬い炭でした。軽症ならば専門外治療もしなければならない時ではありましたが、薬や包帯、ガーゼ、脱脂綿などに至るまで配給制度だったので、銃後の医

療は充分に行われず、本当に困りました。

千葉市内空襲

昭和二十年六月十日朝、千葉女子師範学校に爆弾を落とされたと聞き、翌日だったと記憶しているが、看護学校の友達と行ってみた。

女子師範学校の近くにある井上病院の花岡院長宅は、爆風で跡形もなかった。丁度出勤時で、外に出た院長は地面に伏して助かったが、見送った婦人は家の中で即死だったそうです。師範学校は校舎が無く、硬い塊がぶつかった跡だらけの塀が無惨に残っていました。塀の切れたあたりに「ホロ」をかけたトラックが一台止まっていて、人影もないので車の荷台の方へ廻り驚ろいた。土色の足裏を外向きに、多数の死体を積んであったのです。塀の中から男の人が出てきて、無言で「ホロ」の蓋をしてから運転席に乗って発車しました。師範学校は、軍需工場になっていたのが敵に知れて攻撃の的になったらしいが、材木の様に積み上げられた女性の死体は、何処へ運ばれて、どうなったのでしょう。血も凍る思いと悲しい情景は、今も脳りをはなれません。

千葉市街大空襲

昭和二十年七月七日夜、空襲で燃上がる千葉市を五井から見ました。大型爆弾や焼夷弾の破裂の時は真赤な炎が広がって明るくなり、後から後から続く爆撃に千葉大学病院の建物など何回も鮮明に浮上がって見え、生きた心地がしませんでした。「日本は負けだ」そう思っても言ってはいけないのでした。

夜が明け午後になって、市原郡医師会では、五井、八幡(やわた)地区の救護班が、トラックで、千葉県教育会館へ救護活動に向かいました。私も医師について行ったのですが途中大型不発弾が、浜野町(はまのまち)の民家の庭先に、大穴をあけて突刺さっているのがありました。

救護所には、たくさんの人が収容されていて、まだ続々と集まる有様でした。私は室内係だったので外の様子がわからないまま時間が経ちましたが、大学病院へ送る婦人を担架で運び出した時に外を見ました。

庭にはいろんな人が居ましたが、二才位の幼児が力なく座っていたので思わず立止まってしまいました。青白く貧血した顔で、うつろな目、声も立てない、たゞ「ぼーっ」としている。大けがをしていて、助けられたが、まだ親も知人も現れず名前や身元も不明のままだとの事、本当に痛々しくて可わいそうでした。今でも折りにふれ、あの子はどうなったろう。無事に育ったろうかなどと思い出します。

その夜は教育会館に泊り徹夜で救護に当たることになり、夕食に婦人会炊き出しの、おにぎりと漬物が配られましたが、空腹だったかどうか覚えがありません。夕やみ迫る頃、メラメラ燃える火が残っているのに気づきました。燈火管制下、火が目標になって空襲されるかも知れない不安を持ちました。

夜になって、潰れた防空壕から救出された看護学校の同級生が運び込まれました。

彼女は目をとじたまま動かない。たまたま一緒に出動していた同級生と共に、必至になって名を呼び、側に居ることを告げ、どこか「痛むか」「苦しいか」。と問いかけました。かすかに動いた指先は口元を示しました。医師に話し、ガーゼの水で口を湿してやった所、つむった目から涙がツーッと、こぼれ落ちたのです。意識がある。なんとか。願いも空しく、力尽き死んでしまいました。彼女の遺体は後頭部から首、肩にかけて内出血で紫色でした。

夜が明けて、別の救護班と交代したのは正午頃になり、トラックで千葉市寒川町を通りましたが、そのあたりは軒並棺おけが見え、二～三個安置した家もありました。道路には大八車で棺を運ぶ姿もありました。海岸へ避難した人達へ航空母艦から飛びたったP51戦闘機の激しい銃撃があったのだそうです。

戦争末期

もう昼夜を問わず空襲警報のサイレンで「敵機鹿島灘方面より侵入」。のラジオ放送も度々でした。或る時は空高く敵機B29が銀翼をキラキラ光らせて、ゆうゆう飛んで行ったり、或る時は、警報と同時に艦載機の機銃掃射が、ピューン、ザーッ、パラパラパラッ、とにわか雨の如く通過したこともあります。五井小学校は、駅のすぐそばにあり、敵の目標になり易いと言われていて、子供を帰す状況判断には苦労したと思います。

ある時、下校中の女の子が平旦な田んぼ道で敵機に気づき急いで稲むらに隠れた所を機銃で射たれ、顔が全部ぶっ飛んで、後頭部だけ残った死体で運ばれて来ました。他にも下校中、養老川堤で敵機にあい、身を伏せて通過させながら、後で手を振ったのが見つかり、旋回して来て機銃で射たれ、肩から胴体を弾が貫通して即死したと聞きました。

病気は、赤痢、疫痢、ジフテリア、脚気、栄養失調症、結核、寄生虫病などが多く、入院出来なくて家庭療養をしている人もたくさん居ました。私は医師の指示で夜になるとよく注射に行きました。遠くて暗い田舎道を、一人で、時には同僚と二人で行きました。

度重なる空襲警報も時間が長引くので、段々防空壕へ避難する時間を惜しむようになり、かと言って、避難しないわけにもゆかず、そんなわけで、警報のない時の勤務の忙しさはひとしおで、警報中は、防空壕の中で恐怖に勝る睡魔におそわれる次第でした。

終戦

昭和二十年八月十五日、十七才の時、みんながラジオの前に集まり終戦の詔勅を聞いた。医師は「陛下は泣いている。女は占領軍にごうかんされない様に、坊主頭になって男装したほうがいい。ばかな戦争をしたものだ。」と言いました。

英語禁止の戦中に「英語辞書の安い今のうちに、買って置く方が気がきいている。」と言っていたし、有識者には敗戦がわかっていたのかも知れないと思った。

戦後

学校は焼けたが、授業は転々とした間借り教室で続けられ卒業することができた。それから実務を積み保健所から看護婦免状を授与されたのです。

町では、時々進駐軍兵士を見かけるようになった或る日、医師は「本当のデモクラシーとは。」と聞いたら「民衆の中から、民衆の手で、民衆のために。」と答えたと話したが、私には、皮膚の色の区別は出来ても、顔立ちや表情はわからず、ただ近寄りたくもないと思うだけだった。

戦犯も大問題でしたが、医師は「天皇陛下が平和とはいいものだと言ってるよ。」方式でした。

戦争と戦後の混乱は、私の人生の、つぼみが開く時代のできごとでした。戦後四十数年の今自分の姿は、はっきり見えるようになりました。重大な成人病をかかえてはいるけれど平和な時代の闘病生活に感謝しています。